

## 皇女和宮と中山道柏原宿

米原市柏原にあります柏原宿歴史館では、去る平成24年8月19日まで「中山道と和宮降嫁展」—近江と美濃から—という企画展が開催されました。

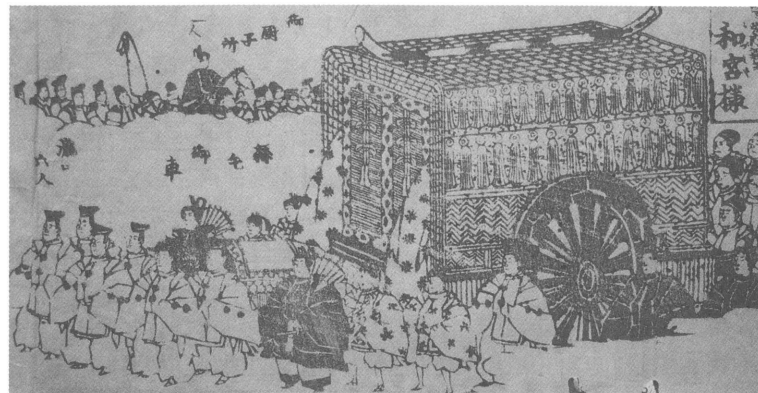
皇女和宮は、弘化3年(1846)仁孝天皇(明治天皇の祖父)の第8皇女として誕生されました。和宮が誕生してまもなく、ペリーの来航や、将軍の後継者問題など朝廷と幕府の緊張状態の増加が、和宮の運命を大きく変えていくのです。

これらを打破するために大老に就任した彦根藩主井伊直弼は、朝廷と幕府の公武一和によって人心と政局を安定させる名目で、14代将軍徳川家茂への皇女和宮の降嫁を画策するのです。

そして、文久元年(1861)10月20日華やかな一行が京都を立出。東海道・中山道を進み24日に柏原宿に到着した一行は4000人を越え、4日間をかけて通過したといわれています。

柏原宿には、墨書の部分に朱書きで新たな間取りなどが加えられ、和宮宿泊のために改装が行われたことがうかがえる柏原宿本陣絵図や、文久元年6月以降、降嫁に備え沿道の掃除や松並木の手入れをすることや、宿泊当

日は寺のお経をはじめ鳴り物は禁止する内容が記された「萬留帳」と呼ばれる万治3年(1660)から昭和30年(1955)にいたる柏原の様々な出来事を記録した資料、また、柏原宿から赤坂宿までの宿駅業務に動員された人足15000人、馬1000疋、支給された手当は金153両以上と記された記録が残り、朝廷と幕府の威信をかけた大規模な和宮の行列の影で、宿場や人足馬を出した助郷村など大変な苦勞を強いられた様子の一端をうかがい知ることができます。(桂田峰男)



▲絲毛御車行列并役人附(部分)

## 情報BOX

◆米原市教育委員会では、平成23・24年度に立命館大学文学部(矢野健一教授)と合同で、縄文時代晩期の杉沢遺跡(米原市杉澤)の発掘調査を実施しました。平成23年度の成果をまとめた下記の報告書が立命館大学文学部から刊行されました。

### 立命館大学文学部学芸員課程研究報告第14集

#### 『杉沢遺跡 —2011年度発掘調査概報—』

※従来11基の合口覆棺が発見されていた杉沢遺跡で、新たに貯蔵穴2基と柱穴の可能性のある土坑など、生業に伴う遺構が初めて検出されました。

◇問合せ先: 立命館大学文学部日本史学専攻考古学コース  
☎075-465-1111(代)

◆米原市伊吹山文化資料館では、下記の冊子を刊行しました。

#### 『伊吹山文化資料館年報14 平成23年度の活動』

※伊吹山の歴史が体感できる登山道案内を収録しています。

◇問合せ先: 米原市伊吹山文化資料館 ☎0749-58-0252

#### 『近江中世山城跡琵琶湖一周のろし駅伝』

◆日時/11月23日(金・祝)午前10時~

◆場所/鎌刃城跡、長比城跡、弥高寺跡など

## ◆◆編集後記◆◆

"遊びをせんとや生まれけむ♪ 戯れせんとや生まれけん♪  
"おなじみの『平清盛』で耳にするフレーズです■文化財担当者は公民館講座や研修などで地域を案内することが多いです■たいがい、その年の大河ドラマを題材にします■昨年は浅井三姉妹がらみでいろいろまわりました。今年は清盛・市内にも頼朝腰掛石とか義仲鎧掛石などがあります。ときどき市外にも足を運びます■そこで登場するのがさきのフレーズ"遊びを〜"。「松田聖子」や「吹石一恵」はお隣の岐阜県不破郡青墓(現大垣市)出身なのです■芸能の里・青墓。東国へ旅立つ人も、東国から都に戻る人も、ここで宴を張って腹を括り、喜びを表したそうです■でも、バスの中で「『清盛』見ている人〜」て聞いても手が挙がるのはチラホラ(シャンギリっ子)

## 米原市文化財ニュース

## 佐加太 第36号

発行 平成24年9月30日

編集 米原市教育委員会

〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1

米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室

TEL.0749(55)8020

印刷 ビッグバードデザイン株式会社



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

## 大原郷と郷里庄を潤す用水「出雲井」

「出雲井」は、大原郷(米原市大原学区と春照・高番・相撲庭)の16ヶ村の水田を灌漑する用水で、横山丘陵先端の龍ヶ鼻でさらに郷里井となって旧長浜市北東部の郷里庄15ヶ村の水田を灌漑します。さらに、その落ち水は旧長浜市域の大半に影響下にかかえる巨大な灌漑面積を有する井川です。

出雲井開削の由来には二つの話が伝えられています。白雉元年(650)、大原野と呼ばれた肥沃な原野を、出雲(鳥根県)の国人大助が多くの人夫を連れてきて開拓し、伊吹山の下に井堰を造り、溝を掘って開拓地を灌漑しました。白雉3年に完成し、出雲の人が開いたことから出雲井と名づけられました。また、問田の小岡に開拓神・素盞鳴尊を祀る大梵天宮(現在の岡神社)を建てて、五穀豊穡を祈願しました。

この岡神社の周辺は、米原市内の古墳密集地のひとつです。境内で昭和59年に発掘された横穴式石室を持つ高岡塚古墳をはじめ、唐古塚古墳・番庄塚古墳・問田廃社古墳・日御子社古墳など、6世紀後半から7世紀初頭の古墳群が、低丘陵上に分布しています。これらの古墳群は出雲井開削に先駆けて、大原野を開いた有力者がいたことを物語るもので、神社背後に広がる湧水地の長曾・白谷が重要な役割を果たしていたと考えられます。

さて、『大原之郷由来出雲井根元記』(大原郷四ヶ村共有文書)に記された由来は次のとおりです。宝治2年(1248)、大原氏の始祖・大原重綱が、宇治川の戦いの功績によって大原郷八千石の所領を賜り、本市場に館を構え、その堀の水を引く際に、伊吹村(米原市伊吹)の出雲喜兵衛が、村の高台から姉川の川筋を見立てて、「姉川の大富尻より二、三町ほど下の釜ヶ淵の少し上流に井堰を設けると、大原の城内も百姓も安心して生活できる」と引水したことに始まります。出雲喜兵衛は、この

## 第36号

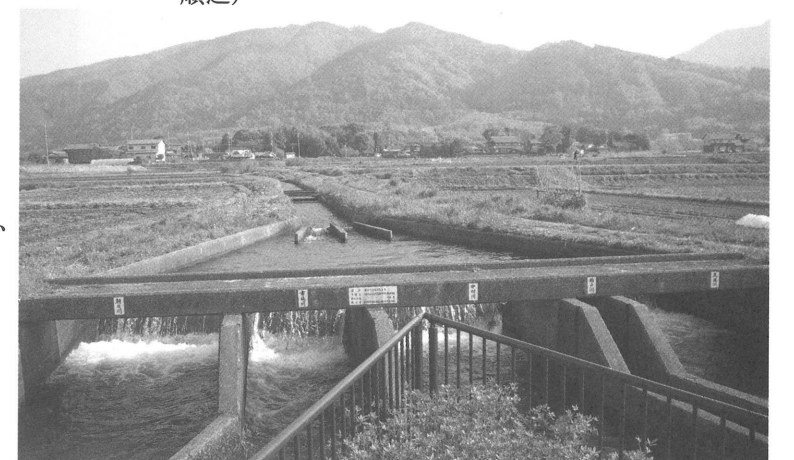
2012年9月30日

滋賀県米原市教育委員会

功績により姉川一之井の権利を鎌倉幕府執権・北条泰時から与えられ、用水は出雲井と名づけられました。

ここでは、大原氏が本市場に居館を築き、その周りの堀に水を引くためにも出雲井開削が必要だったことが記されています。大原氏は、大原郷を灌漑する出雲井の水利を開発し、さらに、出雲井を自らの館の水堀に引き込むことで、用水を掌握する権利をもつ支配者となりました。水利開発と用水管理が大原郷支配の重要な根拠となりました。

出雲井は、大原郷内で分水を繰り返して、烏脇川や野一色川・朝日川など、山東盆地の森林帯を東西に横切る直線的な人工河川が横山山麓の集落まで用水を届けています。これらの村々には、野一色氏・夫馬氏・烏脇氏・池下氏・竹腰氏(小田)など、大原氏の分家や一族が居館を構え、やはり、館の周りに出雲井から引いた水堀を巡らせていることが、古い絵図などから確認されています。大原氏が支配する出雲井の分配システムを各地に配置された一族に繋げることで、大原郷内全域を灌漑する用水網を確立し、その支配を強化・拡大していったのです。(高橋順之)



▲問田五川分水

## 上平寺の「雪室」復活！

ここ数年は、夏ともなると暑く、1日を過ごすにも苦勞します。そんな時はエアコンで涼をとり、食べ物や飲み物は冷蔵庫で保存しています。しかし、かつては冬の時期に保存していた氷や雪を利用して、夏の暑さを凌ぎ、食料の保存に利用していました。それら氷や雪を保存しておく施設が氷室であり、雪室です。

日本においては氷室(雪室)が最初に確認されるのは、日本書紀の仁徳天皇62年(374)の記録です。仁徳天皇の異母弟である額田大中彦皇子が、大和の鬮鷄(現在の奈良県奈良市都祁)へ獵に出掛けた際に、地元豪族の氷室を見つけ、天皇への献上品として氷を差し出しました。これが日本における氷利用のはじまりとされています。その後、奈良時代の長屋王の邸宅跡から出土した10万点以上の木簡の中に当時の氷室の数、蔵氷や氷の運搬記録が記述され、平安時代の清少納言が書いた枕草子には「削り氷にあまづら(甘茶)をいれて」食べるといった記載がみられる等、古くから氷の利活用がされています。しかしながら、氷の数量は限られ、献納品として一部の貴族や上流階級のみしか利用ができていない高級品でした。庶民が氷に親しむことができたのは明治時代以降となってからです。

米原市上平寺の藤古川沿いの林道を進み、河原を渡ったところには、雪室の遺構が残っています。

上平寺の雪室は、地面に縦8m、横5m、深さ2.5mの穴が掘られ、その周囲を石垣で囲い、底にワラや籾殻などを敷き詰められています。冬に雪が降るとその穴の中に雪を踏み固めて入れて、穴の上部には竪穴式住居のような屋根を取り付けて、直射日光



▲雪詰め作業

が当たらないようにします。5月頃になると、穴いっぱいまで入れた雪は幾分か溶けますが、残った雪の塊をこもやムシロに包んで、かつては長浜まで持っていったといわれ、当時の料亭や魚屋では、魚や野菜の保存に重宝されていました。

上平寺には京極氏の館跡などの遺跡が存在することから、その起源が中世以降とも、はたまた明治末期から大正、電化製品が普及するまで、と諸説あり、いつから始まったのかが定かではありません。近年は電化製品の普及で使われることもなくなり、土砂やヘドロが溜まっていたましたが、昨年から地元の方の尽力により復元がされました。

今年の2月に雪室に雪を詰め、5月の雪室まつりで、雪の取り出しが行われる予定でしたが、好天が続いたこともあり、雪室内の雪は全て溶けてしまう結果となりました。

冬になると、邪魔物として思われがちである雪をこのような形で利用すること、そして雪を夏場まで残していた先人の知恵には改めて驚かされます。現在の雪室利用では、野菜や果物を保存しておくことと甘みが増して、「雪室〇〇」といった商品が売り出されています。夏場の雪を楽しむこともさることながら、雪を使ったプランド誕生の可能性まで、雪室には様々な魅力があります。(梅本 匠)

参考文献:

農文協編「農家が教える加工・保存・貯蔵の知恵  
野菜・山菜・果物を長く楽しむ」

田口哲也「氷の文化史【人と氷とのふれあいの歴史】」  
冷凍食品新聞社

大沼芳幸「2011/11/27 上平寺戦国浪漫の雪室祭資料」



▲雪室見学会の様子

## 甲津原の能面と白山信仰

市内最北の地、奥伊吹の甲津原は文芸・芸能の里です。江戸時代天明期を代表する文人・狂歌師の太田南畝に師事した船川謙鼓堂を輩出し、巖教踊や古い盆踊り歌などが伝えられています。能面もそのひとつで、かつてはどの家も床板が縦に張られて能を舞うことができたそうです。

天満神社の面堂に保管されている能面は、米原市の指定文化財で、能面10面と鼓の胴が2個保管されています。室町時代の作品で、かつては、天満神社や春日神社の神事で舞われていたと考えられます。しかし、現在では「面さま」と呼ばれ信仰の対象になっています。この面に触れる。また、この面を出すと必ず雨が降ると信じられ、洗面川(姉川)での雨乞い行事に使われました。また、三番叟の面は「住吉様」の名で、炭焼きを伝えた神様として信仰されています。もともとは春日神社所有だったことが古文書からわかります。伝わっている面は、翁・三番叟・尉・癒見・畔・悪尉・顰・霊・若い女・中年の女の10面です。

甲津原は、昭和30年代まで三本の峠道で美濃(岐阜県)と結ばれていました。日坂(旧揖斐郡久瀬村)へつながる品又峠。諸家(旧揖斐郡坂内村)へつながる新穂峠。広瀬(同)へつながる鳥越峠です。牛や炭、和紙などの物資が行き来し、婚姻関係も美濃地方と結ばれました。

峠を越えた、これら美濃地方の山間部の集落にも、多くの能面が伝わっています。

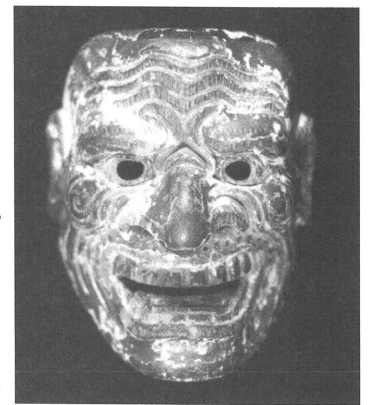
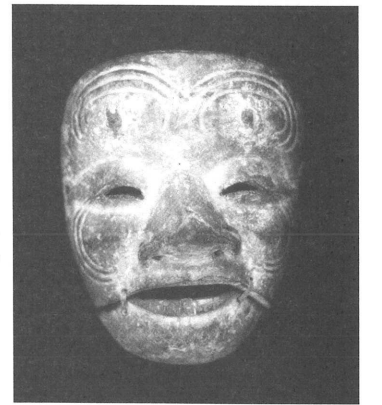
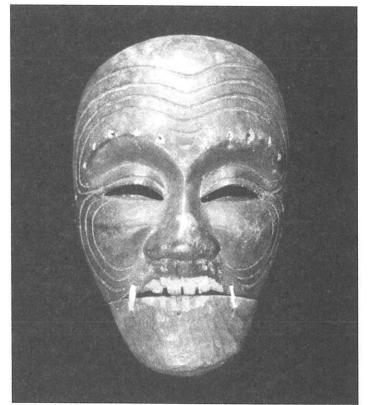
日坂の春日神社には21面伝えられています。その中には、近江長浜の面打ち(能面作家)井関家と、越前武生(福井県)の出目家の作品が伝えられています。峠道で日坂に伝えられたものです。能面は春日神社の神事の能で使われましたが、延享3年(1746)頃にはおこなわれなくなりました。日坂から揖斐川へ下った小津(旧久瀬村)の白山神社には25面あり、日坂に館を構えた高橋但馬守が、天正4年(1576)に白山神社で能を演じた記録があります。このほか、旧春日村川合の六社神社の1面などが知られており、さらに峠を越えて本巢郡能郷や越前につながります。

甲津原の下流の曲谷や甲賀の氏神が白山神社であるように、米原市の伊吹地域は、美濃・越前・加賀(石川県)にまたがる白山の信仰圏の南端にあたります。白山は、自然の恵みや田畑に必要な水を流域の人々にもたらす農耕の神、漁業の神として広く信仰を集めました。かつて、白山の山麓地域

では、鎌倉時代から室町時代を通じて、猿楽(能の祖)が盛んにおこなわれていました。各地域に猿楽の芸能団があり、有名な面打ちを多数出しました。

近江にも上三座・下三座とよばれる猿楽座があり、これらが奉仕した日吉大社(大津市)や多賀大社(多賀町)に古能面が伝わります。一方で、甲津原や旧永源寺町政所の若宮八幡神社に伝わる20面の能面のように山間部にも古能面があります。

甲津原の能面のルーツは、峠道を通じて白山を中心に分布する能舞につながるものと考えられます。(高橋順之)



甲津原の能面▶  
上から  
三番叟・翁・悪尉



▲冬の甲津原